

[論文]

# 神の言葉の焙出によるヨブ記エリフ弁論の要点

—— 因果応報の原理と不条理の超克<sup>1</sup> ——

佐々木 哲 夫

## 1. はじめに

1982年、シカゴ北部<sup>2</sup>のトリニティ神学校<sup>3</sup>において受講した T. E. McComiskey 教授のクラス「諸書」で言及されたヨブ記エリフ弁論が本課題を意識した最初である。その後、シカゴ大学の Dennis G. Pardee 教授<sup>4</sup>、Jon D. Levenson 教授<sup>5</sup>、シカゴ・ルーテル神学校<sup>6</sup>の Walter L. Michel 教授<sup>7</sup>らのクラスで講ぜられたセム語比較やラビ文献に基づく旧約講読の実践を学ぶ中、難解な本文のヨブ記は遠い存在になった。帰国後、神学生時代に初級ヘブル語文法を教授してくださった津村俊夫先生<sup>8</sup>の主催する旧約積義研究会に参加し、旧約積義の学びが継続できたことは幸いだった。

ヨブ記を再度意識しなければならない出来事が起きた。東日本大震災である。2011年3月11日午後2時46分、東北学院大学全学教授会の最中、激震に襲われた。気象庁の発表によれば、三陸沖の地殻が三回連続して破壊され、それぞれが一分半以上の揺れを引き起こし、合計六分間ほどの激しい揺れになったのだ。すぐさま教職員全員が指定の場所へと避難した。建物被害は甚大で、礼拝堂の天井一部が崩落し、講義室の天井や設備は破損し、

<sup>1</sup> 本論文は、2016年6月18日（土）日本基督教会東北支部学術大会における口頭発表「エリフ弁論の要点—神の言葉による焙出—」〔Crucial Point of Elihu's Argument Exposed by the Lord's Words〕の内容を基にして執筆した。

<sup>2</sup> Deerfield, Illinois.

<sup>3</sup> Trinity Evangelical Divinity School

<sup>4</sup> Near Eastern Languages and Civilizations, Division of Humanities at the University of Chicago

<sup>5</sup> The University of Chicago Divinity School, Jon D. Levenson, *The Book of Job in Its Time and in the Twentieth Century*. The LeBaron Russell Briggs Prize, Honors Essays in English · 1971. Massachusetts : Harvard University Press, 1972.

<sup>6</sup> Lutheran School of Theology at Chicago

<sup>7</sup> Walter Ludwig Michel, "The Ugaritic Texts and the Mythological Expressions in the Book of Job : Including A New Translation of and Philological Notes on the Book of Job." Ph.D. Dissertation, University of Wisconsin, 1970.

<sup>8</sup> 当時、聖書神学舎教師及び筑波大学助教授。

図書館の蔵書の大部分が書架から床へ落下した。大津波がそのとき沿岸地域を激しく押し流していることを停電のため知らずにいた。

復旧に努めた結果、5月9日から新年度の講義を始めることができたが、土樋キャンパス礼拝堂は、被災した天井と屋根を全部新しいものに替えることになった。被災直後に組織された災害対策本部によって、在校生及び教職員の安否確認並びに破壊された建物の把握及びキャンパス管理が行われた。東北学院700名ほどの教職員全員の無事が確認されたが、15,000名ほどの園児生徒学生のうち生徒2名及び学生5名が犠牲又は行方不明となった。また、家族の犠牲や家屋の流失損壊浸水などの被災に遭った者が少なからずいた。被災校舎は、業者の工事により以前の姿を取り戻すことができる。しかし、多くの関係者が犠牲となったこの災厄を、東北学院存立の理念であるキリスト教はどのように説明するののかとの無言の問いかけが教職員の心に生じたものと推察された。それはヨブ記の提題である不条理へ問いかけと同じものであると思われた。当時、宗教部長職を拝命していたこともあり、この暗黙の問いに答えるべき責任があると感じ、学内外で与えられた説教奉仕の機会には、ヨブ記42章1-6節及びローマの信徒への手紙11章33-36節を聖書箇所とした<sup>9</sup>。ヨブの三人の友人の議論はともかくとしても、エリフの弁論に不条理を超克する手がかかりを見出せるか否かは、旧約釈義の課題であると同時に、東日本大震災の被災者の実存的課題であり、誠実に対応しなければならない問題となった。

大船渡で医院を開業し『ケセン語訳新約聖書』を著した山浦玄嗣医師は、東日本大震災の被災者であり、大津波によって壊滅的被害を被った瓦礫の町で医師として被災者を支えた。その体験を記した著書『3・11後を生きる「なぜ」と問わない』<sup>10</sup>に以下のような記述がある。

震災後少し落ち着くと、私のところにテレビ、新聞、雑誌などのインタビューが殺到してきました。……彼らは皆、判で押したようにこう言うのです。……「こういう実直で勤勉な立派な人々が、なぜこんな目に遭わなければならないのか。神さまはこういう人たちを、いったいなぜこんなむごい目に遭わせるのか。あなたは信仰者としてどう思いますか。」驚きました。そんなことは夢にも考えたことがなかったからです。考えたこともないことに返事しろなんて、全く途方に暮れてしまいました。ところがどういいうわけか、来る人来る人みんな同じことを尋ねるのです。そのしつこさに、だ

<sup>9</sup> 日本基督教団名取教会（2011, 5.1）、仙台東六番丁教会（2011, 5.8）、石巻山城町教会（2011, 7.3）

<sup>10</sup> 山浦玄嗣『「3.11後を生きる—「なぜ」と問わない」』日本キリスト教団出版局、2012年。

んだん腹が立ってきました<sup>11</sup>。

不条理に対する無言の問いかけを感じたと前述したが、類似の問いかけを山浦医師は実際に質問されたのだ。

……彼らが言いたいのは、「お前たちが拝んでいる神さま、仏さまは、お前たちを見捨てたではないか」「お前たちの信心は何だったんだ」「何のために今まで信心してきたんだ」という非難めいた問いかけなのです。これは非常に質の悪い言い草です。われわれだって満身創痍なのです。心も体も傷だらけなのです。それに塩をすり込むような極めて意地悪い質問です。人の心を絶望で腐らせる猛毒です。だから私は怒ったのです。結局、暇人の考えることにいちいち付き合ってはられないと思うようになりました<sup>12</sup>。

旧約聖書の人物ヨブも、不条理と映る災厄に見舞われた。友人たちの論難の嵐に巻き込まれ、自らをもそこに埋没させてしまう。かつて、McComiskey 教授が講義で語ったエリフの弁論は、不条理の淵からヨブや東日本大震災の罹災者たちを引き上げることのできる信仰表明なのか。それが光明であるとするならば、どのような意味においてそうなのか。本論は、不条理を超克し得る信仰がエリフ弁論の中に見出せるかについて吟味するものである<sup>13</sup>。

## 2. 因果応報と不条理の相関

祝福は、神からの約束である。父祖アブラム〔後にアブラハムと改名〕に与えられた約束（創 12：1-3）は、その具体的内容として、子孫が増えること（創 15：5）と土地を占有すること（創 15：7）を表明している。約束は、やがて契約を結ぶ形式（創 15：18）<sup>14</sup>

<sup>11</sup> 『「なぜ」と問わない』、47-49 頁。

<sup>12</sup> 『「なぜ」と問わない』 49 頁。

<sup>13</sup> ヨブの不条理と思われる災厄は、20 世紀においてユダヤ人が体験したホロコーストを想起させる。V. E. フランクルは、災厄による苦悩を償ってくれるいかなる幸福も地上にはなく、希望、しかも永遠に基づく希望は神以外にないことを語っている。V. E. フランクル『夜と霧』みすず書房、1961 年、181-82 頁。V. E. フランクル『それでも人生にイエスと言う』春秋社、1993 年、129-30 頁。

<sup>14</sup> Thomas E. McComiskey, *The Covenants of Promise: A Theology of the Old Testament Covenants*, (Grand Rapids, Michigan: Baker Book House, 1985), 61. 約束と契約の関係は、武士の誠を想起させる。『『武士の一言』すなわちサムライの言葉、…それはその言葉が真実であることを保証した。…武士の約束は通常、証文なしに決められ実行された。むしろ証文を書くことは武士の面子が汚されることで

や割礼のしるし（創 17：1-14）に具象化される。アブラハムは、しかし、神からの約束の最初の受領者ではない。父祖以前、例えば、蛇に対する呪いの中の言葉「女の子孫」<sup>15</sup>（創 3：15）やノアへの祝福（創 9：1-2）の中の子孫が増える約束にそのプロレゴメナを見出すことができる<sup>16</sup>。約束は、アブラハムからイサク、ヤコブへと継承され、ダビデ契約や新約へ至る永遠性を有している<sup>17</sup>。信仰者が祝福されることは、ユダヤ人にとって父祖伝来の伝統的神学だった。それは、ヨブ記の前提的神学でもあった。

ヨブは、無垢な正しい人<sup>18</sup>で神を恐れ、悪<sup>19</sup>を避けて生きていると紹介されている（ヨブ 1：1）。財産である家畜が羊 7,000 匹、らくだ 3,000 頭、牛 5,000 頭、雌ろば 500 頭を有する東国一番の大富豪で、しかも、息子が七人と娘が三人いた。家畜を飼うことのできる広い土地と子孫に恵まれている。すなわち、ヨブは神が認める正しい信仰生活を実践し、神の祝福を豊かに受けていたのである。実に、ヨブは伝統的神学に適うロールモデル的信仰者だった。その彼が、突然、財産と子孫のすべてを失う災厄に遭い、さらには、一見してその悲惨さを理解できる程に酷い皮膚病（2：7）<sup>20</sup>に罹患する。彼の状態は、見舞いの友人たちを絶句させ（2：11-13）、妻を愚痴らせた（2：9）<sup>21</sup>。

課題は因果応報という伝統的価値観である。すなわち、図 1（A）に示すごとく、神を恐れて正しく生きる人は神から祝福（財産・子孫）され、他方、図 1（B）に示すごとく、罪を為す悪人は裁きを受けるとの原理である。これは、旧約聖書において散見し得る信仰の価値観である。問題は、（B）の災厄に見舞われた場合である。祝福の実体を奪い去ってしまう災厄は、罪に起因する現象で神からの裁きの結果であり、（A）の関係に戻るために（B）の原因である罪を悔い改めなければならないと考えてしまうのである。逆必ず

あった。」新渡戸稲造『武士道』PHP 文庫、75 頁。証文を書いて約束を成立させるのではなく、約束を口にした段階でその成就が保証されたのである。契約（covenant）に先立って約束（promise）が神から人に与えられたのである。

<sup>15</sup> 子孫（בְּרִיָּהּ）

<sup>16</sup> Walter C. Kaiser, Jr., *Toward an Old Testament Theology* (Grand Rapids, Michigan: Zondervan, 1978), 55-59.

<sup>17</sup> *The Covenants of Promise*, 51-58.

<sup>18</sup> 無垢な正しい人（יָשָׁר וְיָצִיט אֱלֹהִים אֱלֹהֵי יְהוָה）

<sup>19</sup> 悪（רָע）

<sup>20</sup> 皮膚病（2：7 יִשְׁחַח）“The word יִשְׁחַח is used in most Semitic languages and denotes ‘heat, fever, inflammation.’ In Lev. 13：18 ff. we are informed that leprosy begins with יִשְׁחַח”. “The Ugaritic Texts and the Mythological Expressions in the Book of Job,” 249.

<sup>21</sup> 愚痴は三毒の一つだが、並木は、妻の言葉 אֵלֶיךָ בָּרַךְ 「神を呪え」の בָּרַךְ を「呪う」ではなく「祝福する」と解し、愚かな悪女の言葉ではなく、両義性を用いたアイロニー表現である可能性を指摘している。並木浩一「旧約聖書における女性」『批評としての旧約学』日本キリスト教団出版局、2013 年、210 頁。

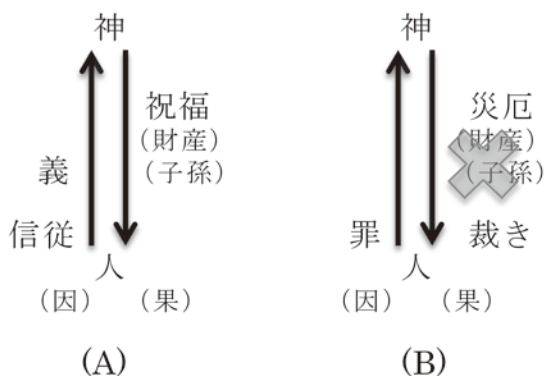


図1 因果応報の原理

しも真ならずなのだが、友人たちは機械的に考える。ヨブ自身も同様に因果応報の原理に囚われていた<sup>22</sup>。その視点からヨブ記を読むならば、ヨブの苦悩の原因、友人たちの議論の論拠、対話のすれ違いなどの様相が把握され得ると考える。以下、最初に友人たちの議論を概観する。

## 2.1. エリファズ

不幸のどん底に突き落とされたヨブは、因果応報の神学に囚われていた。図1 (B) である。これ程に酷い災厄が神から下されたのだから、その原因となる罪は相当なものであるはずと考えられた。自分の子供が心の中で神を呪ったかも知れないと思い、神へいけにえをささげる信仰深いヨブである (ヨブ 1: 5)。しかし、問題は、ヨブに悔い改めるべき罪の心当たりがないことだった。原因のない災厄に直面するヨブの答えは、自分が存在しないほうがよい、生まれてこないほうがよかったとの独白だった (3: 1-26)。ヨブの嘆きを聞いた友人の一人エリファズは、「あえてひとこと言ってみよう。あなたを疲れさせるだろうが。誰がものを言わずにいられようか」 (4: 2) と語り始める。恐らく、彼は三人の中の最年長の者で口火を切るに相応しく、信仰に強い確信を有していた人物と推察される (4: 12-17)<sup>23</sup>。彼の主張は、「考えてみなさい。罪のない人が滅ぼされ、正しい人が絶たれたことがあるかどうか」 (4: 7) のように応報原理の擁護だった。災厄という結果を見るならば、ヨブに罪という原因があるのは明白であり、神に抗弁するヨブの態度をみて「神

<sup>22</sup> 「ヨブは初めから応報原理を越えていた」との指摘もある。並木浩一『「ヨブ記」論集成』教文館、2003年、155頁。

<sup>23</sup> ロバート・ゴルディス『神と人間の書—ヨブ記の研究— (上)』教文館、1977年、194頁。

に向かって憤りを返し、そんな言葉を口に出すとは何事か」(15: 13)と非難する。三回目の議論に至り、エリファズはヨブの罪を具体的に推定し「あなたは甚だしく悪を行い、限りもなく不正を行ったのではないか」(22: 5)と断じ、「神に従い、神と和解しなさい。そうすれば、あなたは幸せになるだろう」(22: 21)と神に恭順を示すように論じ、その結果として与えられる祝福までも「もし、全能者のもとに立ち帰り、あなたの天幕から不正を遠ざけるなら、あなたは元どおりにさせていただける」(22: 23)とまで語る。

## 2.2. ビルダト

エリファズの単なる追従論者のように、ビルダトは「あなたが神を捜し求め、全能者に憐れみを乞うなら、また、あなたが潔白な正しい人であるなら、神は必ずあなたを顧み、あなたの権利を認めて、あなたの家を元どおりにしてください」(8: 5-6)と伝統的の応報原理の論理を短絡的に繰り返す。回を重ねるごとにビルダトの論調は、「いつまで言葉の罫の掛け合いをしているのか。まず理解せよ、それから話し合おうではないか」(18: 2)と感情的になり、「人間は蛆虫、人の子は虫けらにすぎない」(25: 6)とその表現をエスカレートさせている。ビルダトらの応報原理に基づく議論に対し、ヨブは、「断じて、あなたたちを正しいとはしない。死に至るまで、わたしは潔白を主張する。わたしは自らの正しさに固執して譲らない。一日たりとも心に恥じるころはない」(27: 5-6)と反論する。

## 2.3. ツォファル

三人目の論者ツォファルは、「これだけまくし立てられては答えないわけにいくまい。口がうまければそれで正しいと認められるだろうか」(11: 2)「神があなたに対して唇を開き、何と言われるか聞きたいものだ」(11: 5)と未熟な感情的反論に終始する。二回目の議論では、「さまざまな思いがわたしを興奮させるのでわたしは反論せざるをえない」(20: 2)「あなたも知っているだろうが、昔、人が地上に置かれたときから神に逆らう者の喜びは、はかなく、神を無視する者の楽しみは、つかの間にすぎない」(20: 4-5)と独断的な論調になっている。ヨブは「空しい言葉でどのようにわたしを慰めるつもりか。あなたたちの反論は欺きにすぎない」(21: 34)と拒絶するばかりである。三回目の議論において、ツォファルはもはや語る言葉を失い、ただ沈黙する。その沈黙に応じるかのように、ヨブは言葉を継いで論じ(27-31)、語り尽くしてしまうのである(31: 40)。ここに至り友人たちは議論を放棄する(32: 1)。その時、唐突にエリフが口を挟むのである(32: 1-5)。

友人たちの議論は、応報原理に基づく伝統的神学の主張だった。他方、ヨブは、罪のないところに裁きの災厄が神から下されたと主張し、応報原理の適用できない当惑すべき特殊事情を嘆き訴えたのである。実に、ヨブは不条理を主張したのである。しかし、不条理もまた、応報原理を前提とする。応報原理が正しく機能していないとの訴えが不条理の訴えである。換言するならば、友人たちもヨブも応報原理に立脚しての議論を展開しており、要約するならば、災厄という結果の原因がヨブの罪かそれとも神の戯れかという水掛け論的議論に終始したのである。弁神論や神義論は噛み合うことがなかった<sup>24</sup>。嘆き (lament) と呪い (imprecation) [応報] の相克は、詩編にも見出される<sup>25</sup>。呪いの起因として、Chalmers Martin は、神の義や神の支配への熱望、罪への嫌悪を挙げている<sup>26</sup>。いずれにせよ、エリフ弁論に不条理を超克し得る論拠を見出せるか否かは、正典におけるヨブ記存在の価値を決定する程に重要な課題であると言っても過言ではない<sup>27</sup>。

### 3. 解釈史におけるエリフ弁論の位置

エリフは、「わたしは若く、あなたたちは年をとっておられる。だからわたしは遠慮し、わたしの意見をあえて言わなかった。日数がものを言い、年数が知恵を授けると思っていた。しかし、人の中には霊があり、悟りを与えるのは全能者の息吹なのだ。日を重ねれば賢くなるというのではなく、老人になればふさわしい分別ができるのでもない。それゆえ、わたしの言うことも聞いてほしい。わたしの意見を述べてみたいと思う」(32: 6-10) と語り、突然の登場をしている。

グレゴリウス 1 世 (在位: 590 年-604 年) は、このようなエリフの語り口を “Elifu is

<sup>24</sup> 『ヨブ記』論集成』116-17 頁。

<sup>25</sup> Chalmers Martin は、「呪いの詩編」(Imprecatory Psalm) ではなく「詩編における呪い」(imprecations in the psalms) と称すべきであると事例を挙げて提案している。Chalmers Martin “Imprecations in the Psalms,” [Princeton Theological Review 28 (1929)], in *Classical Evangelical Essays in Old Testament Interpretation.*, com. and ed. By Walter C. Kaiser, Jr. (Grand Rapids, Michigan : Baker Book House, 1972), 113-132.

<sup>26</sup> “Imprecations in the Psalm, 121-24.

<sup>27</sup> ヨブは自らが経験した災厄をめぐって不条理を論じているが、他方、コヘレトは人間の日常を客観的に観察し、人は神の美しい配剤や人に与えられた永遠を思う能力にも関わらず神の御業と時の変化の意味を理解できないことを論じている。コヘレトは、その解決をヨブ記のように主による非日常的介入に委ねず、この世の日常的営みにおいて見出そうとする。コヘレトが神顕現のないヨブ記と評される所以でもある。佐々木哲夫「伝道の書第 3 章 1-15 節における伝道者の信仰」『尚絅女学院短期大学研究報告』35 集, 1988 年, 13-22 頁。時期尚早の死や後継者を欠いた悲惨な死は不条理であるとし、そのようなこの世の不条理を克服すべく、復活や死後の裁きという応報原理を満たす信仰が神を弁証するなかで出現したと考える論考がある。しかし、コヘレトは、死を因果応報の伝統的神学の中に収めず、すべての人に到来する自然の結末であるという現実的視点を堅持して議論を展開している。佐々木哲夫「伝道の書第 9 章における死と知恵」『途上』20 号, 1991 年, 41-56 頁。

reproved for right sayings in a wrong way : because in the very truths which he utters he is puffed up with arrogance. And he represents thereby the character of arrogant, because through a sense of what is right he rises up into words of pride.”<sup>28</sup> と否定的に評価し、他方、中世のユダヤ教の伝承は、エリフを積極的に評価する。例えば、サディア（10世紀）の『ヨブ記注解』やイブン・エズラ（1140年）の『注解』は、神の義とヨブの災厄との関連についての疑問にエリフ弁論が解答を与えているとする<sup>29</sup>。エリフに対するこのような両極端の評価は、宗教改革者にも見られる。例えば、ルターはエリフをツウィングリにたとえ、無益なおしゃべりと酷評する<sup>30</sup>。他方、カルヴァンは、ヨブ記の連続講解説教〔Sermon 15（ヨブ 32：1-3）〕において、エリフを “However we see in this example of the person of Elifu that God has yet left some good seed in the midst of shadows, and that there was some good and holy doctrine.”<sup>31</sup> と肯定的に評価する。さらに、対照的な評価は、近代の旧約聖書研究にも観察される。旧約聖書成立の前史に幾つかの資料の存在を想定する批評学研究は、エリフ登場の場面に至るまでエリフへの言及が見られないことやエリフ弁論以後においても特段の言及がないというヨブ記全体の構造に注目し、エリフ弁論の記述に異なる由来を想定し、エリフの弁論部分は追記であると判断し、消極的扱いをする。例えば、関根は「エリフの弁論は元来ヨブ詩人とは関係のない後の人の挿入であるとわたしは解する。この六つの章は三一章の終わりとは三八章の始めとの密接な関連を裂いており、エリフなる人物は本論の前後のわくの部分に全然出てこない。さらに、ヨブの苦難の問題に対するエリフの解決は独自のもので、ヨブ詩人の意図したものと異なると思われる」<sup>32</sup> と記し、並木も「三二章から三七章は『エリフの弁論』ですが、最初にヨブ記をまとめたヨブ記作者の作品にはなかった部分でしょう」<sup>33</sup> とし、エリフ弁論の位置を低いものとみなしている<sup>34</sup>。旧約聖書にそれぞれ異なる歴史背景を再構成する批評的解釈は、聖書の正典としての文脈理解に困難を生じさせるとの指摘がある<sup>35</sup>。他方、ヨブ記全体の整合性を勘案する伝統的聖書理解

<sup>28</sup> Gregory the Great, *The Moralia on the Book of Job* [Online, <http://www.lectionarycentral.com/Gregory-Moralia/Book23.html>], vol. 3, 23 : 4/28. Ragnar Andersen, “The Elifu Speeches,” *Tyndale Bulletin* 66, 1 (2015) : 76.

<sup>29</sup> “The Elifu Speeches,” 76. 『ヨブ記』論集成』281-82頁。

<sup>30</sup> Tischreden 142. *Martin Luther Werk : Tischreden* (Weimar : H. Böhlau Nachfolger, 1912), 68 [line 19-20].

<sup>31</sup> *Sermons from Job by John Calvin* (Grand Rapids : Eerdmans, 1952), 217.

<sup>32</sup> 関根正雄『ヨブ記註解』教文館、1970年、3頁。

<sup>33</sup> 『ヨブ記』論集成』143頁

<sup>34</sup> 並木は、中世盛期にエリフの価値が著しく「上昇した」と指摘している。『ヨブ記』論集成』281頁。

<sup>35</sup> “I have argued that the price of recovering the *historical* context of sacred books has been the erosion



や共時的聖書釈義は、エリフ弁論を、形式 (form) においても内容 (contents) においても無視できないものとする。例えば、ゴルデイスは、エリフ弁論の内容と構成について紙幅を割いて考察し「要するに、エリフの弁論は補助的ではあるが重大な思想をもって神の弁論の主要テーマを補っている」とまとめている<sup>36</sup>。批評研究に立脚しながらも正典批評の視点からヨブ記を論ずる B.S. Childs の評価にも注目しておきたい。彼は、エリフ弁論について “The Elihu speeches function hermeneutically to shape the reader’s hearing of the divine speeches. They shift the theological attention from Job’s questions of justice to divine omnipotence and thus offer a substantive perspective on suffering, creation, and the nature of wisdom itself” と述べ、hermeneutically と限定しつつも積極的な評価を与えている<sup>37</sup>。なお、近年においてもエリフ弁論を巡る様々な議論が、これまでのエリフ理解を意識しつつ毎年のごとく発表されている<sup>38</sup>。

#### 4. エリフ弁論の構造

「さてヨブよ、わたしの言葉を聞き、わたしの言うことによく耳を傾けよ」(33: 1) で始まるエリフ弁論の構造を、特徴的表現、例えば、くりかえし (repetition), 要語 (catchword), 畳句 (refrain) などを区切りの指標 (divider phrase) とする方法を用いて分析するならば<sup>39</sup>、すなわち、「エリフは更に言った」(34: 1, 35: 1)<sup>40</sup>、「エリフは更に言葉を続けた」

---

of the largest literary contexts that undergird the traditions that claim to be based upon them.” Jon D. Levenson, *The Hebrew Bible, the Old Testament, and Historical Criticism* (Louisville, Kentucky: John Knox Press, 1993), 4. 津村は、創世記 1 章から 11 章の講義についての前提的方法論に言及する中で資料説を前提にしていないことを挙げている。津村俊夫「創造と洪水」『聖書セミナー No. 13 創造と洪水』日本聖書協会、2006 年、6-7 頁。批評的に聖書解釈を行う場合、本文批評、歴史批評、文法批評、文学批評、様式批評、伝承批評、編集批評など釈義を個別に行い、最終段階として、散在するそれぞれの釈義結果を統合することを目標とする。しかし、統合作業が難しい段階である。John H. Hays and Carl R. Holladay, *Biblical Exegesis: A Beginner’s Handbook* (Atlanta: John Knox Press, 1982), 112.

<sup>36</sup> 『神と人間の書 (上)』251-71 頁。

<sup>37</sup> Brevard S. Childs, *Introduction to the Old Testament as Scripture* (Philadelphia: Fortress Press, 1982), 541.

<sup>38</sup> Ragnar Andersen, “The Elifu Speeches,” *Tyndale Bulletin* 66, 1 (2015): 75-94., Martin A. Shields, “Was Elihu Right?” *Journal for the Evangelical Study of the Old Testament* 3, 2 (2014): 155-70., Michael V. Fox, “God’s Answer and Job’s Response,” *Biblica* 94 (2013) 1-23., T.C. Ham, “The Gentle Voice of God in Job 38,” *Journal of Biblical Literature* 132, 3 (2013): 527-41., Choon-Leong Seow, “Elifu’s Revelation,” *Theology Today*, 68, 3 (2011): 253-71., Andrew Prideaux, “The Yahweh Speeches in the Book of Job: Sublime Irrelevance, or Right to the Point?” *Reformed Theological Review* 69, 2 (2010): 75-87.

<sup>39</sup> R.E. Murphy, *Wisdom Literature: Job, Proverb, Ruth, Canticle, Ecclesiastes and Esther*; The Forms of the Old Testament Literature, no. 13 (Grand Rapids, Eerdmans, 1981), 127-31., 佐々木哲夫「士師記の構成と編集」『旧約聖書と戦争—士師の戦いは聖戦か?—』教文館、2000 年 120-21 頁 [「士師記の構成と編集」『Exegetica (旧約釈義研究)』] 10, 1997 年、77-88 頁。

<sup>40</sup> וַיִּבֶן אֱלִיֻּהוּ אֶת־דְּבָרָיו

(36: 1)<sup>41</sup>の章句を指標とするならば、エリフ弁論を(1) 33: 1-33, (2) 34: 1-37, (3) 35: 1-16, (4) 36: 1-37: 24の四つに区分することができる。それぞれの論旨を以下に概観する。

#### 4.1. 33: 1-33

最初の部分において、エリフは、ヨブに罪のあることを応報原理に基づいて指摘し、神の義を以下のとおり弁護する。

あなたが話すのはわたしの耳に入り、声も言葉もわたしは聞いた。『わたしは潔白で、罪を犯していない。……』ここにあなたの過ちがある、と言おう。なぜ、あなたは神と争おうとするのか。神はそのなさることをいちいち説明されない。(33: 8-13)

エリフは、ヨブが罪を悔い改めるならば、祝福の回復があることを語る。

わたしは罪を犯し、正しいことを曲げた。それはわたしのなすべきことではなかった(33: 27) ……〔とヨブが罪を告白し悔い改めるならば〕 ……その魂を滅亡から呼び戻し、命の光に輝かせてくださる。(33: 30)

上記のとおり、エリフ弁論の最初は、三人の友人たちと同じ応報原理の議論を展開している。

#### 4.2. 34: 1-37

弁論第二の部分でエリフは、以下のように、ヨブの無罪主張を特段に非難する。

ヨブはこう言っている。「わたしは正しい。だが神は、この主張を退けられる。わたしは正しいのに、うそつきとされ罪もないのに、矢を射かけられて傷ついた。」ヨブのような男がいるだろうか。(34: 5-7)

ヨブはよく分かって話しているのではない。その言葉は思慮に欠けている。悪人のよう

---

<sup>41</sup> נִסְּךָ אֱלֹהִים וַיֵּאמֶר

な答え方をヨブはする。彼を徹底的に試すべきだ。まことに彼は過ちに加えて罪を犯し、わたしたちに疑惑の念を起こさせ神に向かってまくしたてている。(34: 35-37)

#### 4.3. 35: 1-16

三番目の部分において、エリフは、ヨブ災厄の原因探しの議論から、創造者である主に視点を転じる。

あなたに、また傍らにいる友人たちにわたしはひとこと言いたい。天を仰ぎ、よく見よ。頭上高く行く雲を眺めよ。あなたが過ちを犯したとしても神にとってどれほどのことだろうか。繰り返し背いたとしても神にとってそれが何であろう。(35: 4-6)

しかし、だれも言わない。「どこにいますのか、わたしの造り主なる神。夜、歌を与える方、地の獣によって教え、空の鳥によって知恵を授ける方は」と。だから、叫んでも答えてくださらないのだ。悪者が高慢にふるまうからだ。神は偽りを聞かれず、全能者はそれを顧みられない。(35: 10-13)

#### 4.4. 36: 1-37: 24

四番目の部分でエリフは「待て、もう少しわたしに話させてくれ。神について言うべきことがまだある」(36: 2)と語り続け、祝福(36: 11, 16)と裁き(36: 12-14)に言及し、応報原理に従って生きることの肝要さを説く(36: 17-21)が、その論旨は、一転、応報原理の起動因である万物の創造者の偉大さへの賛美となる(36: 22-37: 24)。賛美における鍵語(keywords)は、以下の雲、稲妻、雷鳴である。

##### 4.4.1. 雲

「雲<sup>42</sup>は雨を含んで重くなり、密雲<sup>43</sup>は稲妻<sup>44</sup>を放つ。」(37: 11)「あなたは知っているか、どのように神が指図して密雲<sup>45</sup>の中から稲妻<sup>46</sup>を輝かせるかを。」(37: 15)「あ

<sup>42</sup> עָב

<sup>43</sup> עֲנַן

<sup>44</sup> אִוֶּרָה

<sup>45</sup> עֲנַן

<sup>46</sup> אִוֶּר

あなたは知っているか、完全な知識を持つ方が垂れこめる雨雲<sup>47</sup>によって驚くべき御業を果たされることを。」(37: 16)

#### 4.4.2. 稲妻

「神はその上に光<sup>48</sup>を放ち、海の根を覆われる」(36: 30)「神は御手に稲妻の光<sup>49</sup>をまとい、的を定め、それに指令し」(36: 32)「閃光<sup>50</sup>は天の四方に放たれ、稲妻<sup>51</sup>は地の果てに及ぶ。」(37: 3)

#### 4.4.3. 雷鳴

「どのように雨雲<sup>52</sup>が広がり、神の仮庵が雷鳴をとどろかせる<sup>53</sup>かを悟りうる者があるろうか。」(36: 29)「聞け、神の御声のとどろき<sup>54</sup>を、その口から出る響き<sup>55</sup>を。」(37: 2)「神は驚くべき御声<sup>56</sup>をとどろかせ、わたしたちの知りえない、大きな業を成し遂げられる。」(37: 5)

雲、稲妻、雷鳴は、シナイにおける神顕現の表象であり、神顕現は、神に従う者には救い、不信仰な者には裁きが下る恐るべき時の到来だった。それは、モーセの角笛によって告知され、その音を聞くと民たちは皆震えた<sup>57</sup>。

三日目の朝になると、雷鳴<sup>58</sup>と稲妻<sup>59</sup>と厚い雲<sup>60</sup>が山に臨み、角笛の音が鋭く鳴り響いたので、宿営にいた民は皆、震えた。(出 19: 16)

<sup>47</sup> עָב

<sup>48</sup> אֹר

<sup>49</sup> אֹר

<sup>50</sup> יִשְׁרָהוּ

<sup>51</sup> אֹר

<sup>52</sup> עָב

<sup>53</sup> תִּשְׁאַחַח

<sup>54</sup> רֶגֶז קָלוּ

<sup>55</sup> הִגָּה

<sup>56</sup> קָלוּ

<sup>57</sup> 佐々木哲夫「ギデオンの戦いにおける角笛 (שָׂפָר) (士師記 7 章)」『東北学院大学宗教音楽研究所紀要』創刊号, 1997 年, 5-6 頁。

<sup>58</sup> קָלוּ

<sup>59</sup> בָּרָקִים

<sup>60</sup> עָנָן כָּבֵד

角笛の音がますます鋭く鳴り響いたとき、モーセが語りかけると、神は雷鳴をもって<sup>61</sup> 答えられた。(出 19: 19)

雲、稲妻、雷鳴と角笛の音は、イスラエルの民だけでなく、モーセの姑エトロが祭司を務めたミディアン人においても恐るべき神顕現を告知する表象であると理解されていた。後に、ギデオンは、水瓶を割る音、松明の灯り、角笛の音、鬨の声「主のために、ギデオンのために剣を」による夜襲でミディアンの大軍に壊滅的大混乱を起こして勝利したが、それは、松明の灯り（稲妻）と水瓶を割る音（雷鳴）と角笛の音によって、神の軍勢が到来したとミディアン軍に誤認させた結果だった<sup>62</sup>。エリフは、良く知られている神顕現の表象である雲や稲妻や雷鳴を用いて神の権威を論じ、「全能者を見いだすことはわたしたちにはできない。神は優れた力をもって治めておられる。憐れみ深い人を苦しめることはなさない。それゆえ、人は神を畏れ敬う。人の知恵はすべて顧みるに値しない」(ヨブ 37: 23-24) と要約したのである。

## 5. 神の言葉

### 5.1. 「これは何者か」<sup>63</sup>の意味

ところで、エリフ弁論が雲、稲妻、雷鳴などの表象を用いて創造者なる神の権威への言及に及んだところで、主は嵐の中から突然ヨブに答えて「これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて神の経綸を暗くするとは」(38: 1-2)<sup>64</sup> と語り始める〔表1参照〕。

問題は、「これは何者か」<sup>65</sup>の指示代名詞「これ」<sup>66</sup>が誰を指し示しているかである。エリフ弁論を本文に元々存在しなかった部分として削除するならばヨブを指示する文脈になるが、現存のマソラ本文を保持するならば直近の文脈のエリフを指示していると解される。ヨブは、応答において、確かに「『これは何者か。知識もないのに神の経綸を隠そうとするとは。』<sup>67</sup> そのとおりです。わたしには理解できず、わたしの知識を超えた驚くべき御業をあげつらっておりました」(42: 3) と謝罪しており、自身が指示対象であることを告白

<sup>61</sup> בְּקוֹל

<sup>62</sup> 『旧約聖書と戦争』51-52頁。

<sup>63</sup> מִי זֶה

<sup>64</sup> מִי זֶה | מִתְּשִׁיבָה עֲצָה בְּמַלְאֵי קְלִי-דָעַת: <sup>64</sup>

<sup>65</sup> מִי זֶה

<sup>66</sup> זֶה

<sup>67</sup> מִי זֶה | מִעֲלִיּוֹם עֲצָה בְּלִי דָעַת

表1 ヨブ記梗概

序文 (1: 1-2: 13)	
独白-ヨブの嘆き (3: 1-26)	
第一回 友人との議論 (4: 1-14: 22)	
エリファズとヨブ	
ビルダドとヨブ	
ソオフアルとヨブ	
第二回 友人との議論 (15: 1-21: 34)	
エリファズとヨブ	
ビルダドとヨブ	
ソオフアルとヨブ	
第三回 友人との議論 (22: 1-27: 23)	
エリファズとヨブ	
ビルダドとヨブ	
知恵の賛美, ヨブの嘆き (28: 1-31: 40)	
エリフの登場 (32: 1-22)	
エリフの弁論 (1) (33: 1-33) [応報原理による主張]	
エリフの弁論 (2) (34: 1-37) [ヨブの無罪を否定]	
エリフの弁論 (3) (35: 1-16) [創造者に視点を移す]	
エリフの弁論 (4) (36: 1-37: 24) [創造者の権威を賛美]	
神の言葉 (1) (38: 1-40: 2) 「これは何者か」	
ヨブの応答 (1) (40: 3-5)	
神の言葉 (2) (40: 6-41: 26)	
ヨブの応答 (2) (42: 1-6)	
神の言葉 (3) (42: 7-9)	
ヨブへの祝福 (42: 10-17)	

している。他方, 38章2節の指示代名詞「これ」<sup>68</sup>がエリフを指示しているとするならば, エリフ弁論そのものが「知識もないのに, 言葉を重ねて神の経綸を暗くするとは」という神の言葉によって拒否されることになる。指示代名詞「これ」をどのように解するかがエリフ弁論の評価を左右することになる。

邦語の「これ」を解釈するのではなく, マソラ本文の  $\text{זֶה}$  [zeh] (「これ」) に注目するならば, Joüon Muraoka の用例解説 “ $\text{זֶה}$  is often added to an interrogative word without any notable change in meaning : Job 38.2  $\text{זֶה} \text{ מִי} \text{ מָה} \text{ עָדָּם} \text{ מִי} \text{ מָה} \text{ עָדָּם} \text{ מִי} \text{ מָה} \text{ עָדָּם}$  who ever?” が参照される<sup>69</sup>。すなわち, 38章2節を直訳するならば, 「いったい誰だ, 知識もなく言葉で経綸を暗くしている者は」となる。これは, 必ずしもエリフ弁論を否定する表現ではなく, 42章3節のヨブの告白を参照するならば, ヨブを意図している表現と解し得るのである。

<sup>68</sup>  $\text{זֶה}$

<sup>69</sup> Paul Joüon, S.J. and T. Muraoka, *A Grammar of Biblical Hebrew : Part Three : Syntax* (Roma : Editrice Pontificio Instituto Biblico, 1993), 532 [143g.]

本論では、エリフ弁論の意義を神の言葉との相関において吟味することによってさらに論考を進める。エリフ弁論の内容が神の言葉と整合するか矛盾するかの吟味によって、エリフ弁論の論旨を炙り出し、エリフ弁論の妥当性を明らかにしたいと考えるからである。そのために、まず、神の言葉（38：1-40：2, 40：6-41：26）を概観する。

## 5.2. 神の言葉の構造

構造分析を行うための指標として「主はヨブに答えて仰せになった」<sup>70</sup>、「ヨブは主に答えて言った」<sup>71</sup>の表現に注目するならば、神の言葉<sup>72</sup>とヨブの応答<sup>73</sup>を表2のように区分することができる。

主の言葉は、「わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ」<sup>74</sup>や「知っているなら…」<sup>75</sup>の章句、また、疑問詞（ $\text{הֲ}$ ）<sup>76</sup>による表記が示すように、主の天地万物創造の業にどれほど関与しているかと厳しく問うものである。その内容を以下表3に列記する。

### 5.2.1. 神の言葉（1）（38：1-40：2）

神の言葉（1）は、表3に示したように宇宙から地の動物に至る神の創造の業の描写に集中し、その後、ヨブに対し「全能者と言い争う者よ、神を責めたてる者よ、答えるがよい」（40：2）と問う。

ヨブの答えは「どうしてあなたに反論などできましょう。わたしはこの口に手を置きます。……もう主張いたしません。もう繰り返しません」（40：4-5）であるが、神はヨブに「お前に尋ねる。わたしに答えてみよ」（40：7）<sup>77</sup>と再度語り始めるのである。

表2 神の言葉とヨブの応答

神の言葉（1）	（38：1-40：2）
ヨブの応答（1）	（40：3-5）
神の言葉（2）	（40：6-41：26）
ヨブの応答（2）	（42：1-6）

<sup>70</sup>  $\text{וַיֹּאמֶר יְהוָה אֶת־אֵיּוֹב אֶת־יְהוָה אֵת־אֵיּוֹב}$  (38：1, 40：1, 40：6.)

<sup>71</sup>  $\text{וַיֹּאמֶר יְהוָה אֶת־יְהוָה אֵת־אֵיּוֹב}$  (40：3, 42：1.)

<sup>72</sup> 38：1-40：2, 40：6-41：26.

<sup>73</sup> 40：3-5, 42：1-6.

<sup>74</sup>  $\text{אֲשַׁאֲלֶךָ יְהוָה אֵיּוֹב יְהוָה אֵיּוֹב}$  (38：3, 40：7)

<sup>75</sup>  $\text{הֲיָדָעְתָּ}$  (38：4, 5, 12, 18, 21, 33, 39：1, 2),  $\text{הֲיָדָעַ$  (38：5)

<sup>76</sup> Interrogative  $\text{הֲ}$ ：38：12, 16, 17, 22, 28, 31, 32, 33, 34, 35, 39, 39：1, 9, 10, 11, 12, 19, 20, 26, 40：2, 8, 26, 27, 28, 29, 31, 41：1.

<sup>77</sup>  $\text{אֲשַׁאֲלֶךָ יְהוָה אֵיּוֹב יְהוָה אֵיּוֹב}$  (40：7)

表3 神による創造の業（1）〔邦訳は適宜選択し私訳を掲載した〕

章節	創造の対象	問いの内容
38: 4	地の基を据えた	何処にいたか。知っているか
38: 5	地の基の広がり	誰が定めたか知っているか
38: 6-7	台座, 隅の親石	誰が据えたか
38: 8-11	海の創造	
38: 12	朝, 暁	命令し指示したか
38: 13-15	地の果て, 大地の変容	
38: 16	海の源, 深淵の底	行ったことがあるか
38: 17	死の門	見たことがあるか
38: 18	大地の広がり	知っているか
38: 19-21	光の場所, 闇の場所	何処か, 知っているはずだ
38: 22-23	雪の倉, 霧の倉	入ったか, 見たか
38: 24	光の道, 東風の道	何処か
38: 25	豪雨の水路, 稲妻の道	誰が引いたか
38: 26-28	雨, 露の滴	誰が生んだのか
38: 29-30	氷, 霜	誰が生んだのか
38: 31	スバル, オリオン	引き締め緩めることができるか
38: 32	銀河, 大熊子熊	導き出せるか
38: 33	天の法則	知っているか, できるか
38: 34	雨雲, 洪水	おまえを包むか
38: 35	稲妻	送り出せるか
38: 36	知恵, 悟り	誰が置いたか
38: 37-38	雲, 天の瓶	誰が数え, 傾けるか
38: 39-40	獅子の獲物, 子獅子の食欲	捕り, 満たせるか
38: 41	鳥の餌	誰が与えるか
39: 1-4	野山羊	子を産み, 育つことを知っているか
39: 5-8	野ろば	誰が解き放ったか
39: 9-12	野牛	仕事をするか
39: 13-18	駝鳥	分別なく動く
39: 19-25	馬	跳ねさせられるか
39: 26-30	鷹, 鷲	あなたが分別を与えたのか



### 5.2.2. 神の言葉 (2) (40 : 6-41 : 26)

再び語られた神の言葉の内容を以下表 4 にまとめる。

表 4 神による創造の業 (2)

章節	創造の対象	問いの内容
40 : 7-14	ヨブ自身	おまえは神なのか
40 : 15-24	ベヘモット [河馬]	捕らえられるか
40 : 25-41 : 26	レビヤタン [鱷] <sup>78</sup>	捕らえ屈服させられるか

神による被造物すら制御できない有限な者が全能なる創造者と言い争うことは無謀であると悟ったヨブは、「あなたは全能であり御旨の成就を妨げることはできないと悟りました」(42 : 2) と応答し、「『これは何者か。知識もないのに神の経綸を隠そうとするとは。』そのとおりです。わたしには理解できず、わたしの知識を超えた驚くべき御業をあげつらっておりました」(42 : 3) と悔い改めるのである (42 : 6)。

## 6. エリフ弁論の要点

### 6.1. エリフ弁論と神の言葉の比較

神の言葉「これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて神の経綸を暗くするとは」(38 : 2) は、必ずしもエリフ弁論を否定するものではなく、それに続く神の言葉もエリフ弁論を否定する内容ではないことを前述した。むしろ、神の言葉 (1) (2) は、エリフ弁論 (4) (36 : 1-37 : 24) [創造者の権威を賛美] において開陳された内容を受け、それをさらに詳述展開している観すらある。神の言葉の中にエリフ弁論を明示的に肯定する表現も否定する表現も見出せないので、神がエリフ弁論を容認したか拒否したかを判断することができない<sup>79</sup>。そこで、エリフ弁論と神の言葉の内容的比較をすることによって間接的に推論したいと考える。本論では、神顕現の表象である雲、稲妻、雷鳴に関するエリフ弁

<sup>78</sup> レビヤタンは、古い神話に登場する怪獣の名前である。古代の文学の断片的用語が旧約聖書において借用残存されていても、旧約聖書においてもなお神話的怪獣であることを証明するものではない。F. I. アンダーソン『ヨブ記』ティンデイル聖書注解、いのちのことば社、2014年 [1976年]、478頁。

<sup>79</sup> 40 : 11-12「怒って猛威を振るい、すべて驕り高ぶる者を見れば、これを低くし、すべて驕り高ぶる者を見れば、これを挫き、神に逆らう者を打ち倒し」の「高ぶる者」(כָּל־גֹּבֵהַ) や「神に逆らう者 [悪者ども]」(רָשָׁעִים) にエリフが含まれるかは、本文においては明示的ではない。“Yahweh’s second speech opens with a challenge for Job to demonstrate that he has the power to govern the earth with an arm as glorious and mighty as El’s (40 : 7-14).” Norman C. Habel, *The Book of Job*, Old Testament library (London : SCM Press, 1985), 558.

表5 エリフ弁論と神の言葉の比較〔邦訳は適宜選択し私訳を掲載した〕

主題	エリフ弁論（章節）	神の言葉（章節）
雲	あなたは知っているか。完全な知識を持つ方が垂れこめる雨雲（ <b>נִבְּ</b> ）によって驚くべき御業を果たされることを。 (37: 16)	お前が雨雲（ <b>נִבְּ</b> ）に向かって声をあげ、洪水がお前をおおわせることができるか。 (38: 34)
稲妻	あなたは知っているか。どのように神が指図して密雲（ <b>אֲנִי</b> ）の中から稲妻（ <b>רָאָם</b> ）を輝かせるかを。 (37: 15)	お前は、稲妻（ <b>רָאָם</b> ）を急送し、排出し、お前に「ここにいます」と言わせられるか <sup>80</sup> 。 (38: 35)
雷鳴	だれが、雨雲（ <b>נִבְּ</b> ）の広がりとその仮庵の雷鳴（ <b>רָאָם</b> ）を悟りうるか。 (36: 29)	お前は神に劣らぬ腕をもち、神のような声（ <b>קוֹל</b> ）をもって雷鳴をとどろかせる（ <b>רָאָם</b> ）のか。 (40: 9)

論を抽出し、対応する神の言葉と比較する。両者を表5にまとめた。

エリフ弁論と神の言葉の内容の相違は、以下に列挙するとおり明瞭である。

- (1) エリフはヨブに「知っているか」と問うが、神はエリフに「行えるか」を問う。すなわち、創造の主体か客体かが問われている。
- (2) 創造者は、創造を行うにとどまらず、被造物を統治し得る権能を有している。
- (3) 創造者の創造と統治は、混乱ではなく調和である。
- (4) 創造者の創造と統治は、創造者の主権的行為である。

## 6.2. エリフ弁論の要点

ヨブと友人たちの対話の主題は、神と人との関係における因果応報の原理と不条理であった。それらを模式的に示すならば図2のとおりになる。

因果応報の原理とは、図2 (A) に示されるとおり、良い原因に対して良い結果が与えられ、反対に、悪い原因に対して災厄など悪い結果が下されることであった。他方、不条理とは、図2 (B) に示されるとおり、良い原因が悪い結果を生み、反対に、悪い原因が良い結果を生むように見える現象のことである<sup>81</sup>。ヨブと友人たちの議論は、因果応報の

<sup>80</sup> Michel, "The Ugaritic Texts," 231. [38: 35]

<sup>81</sup> コヘレトも「この地上には空しいことが起こる。善人でありながら悪人の業の報いを受ける者があり、悪人でありながら善人の業の報いを受ける者がある。これまた空しいと、わたしは言う」(8: 14)と不条理を提起している。佐々木哲夫「伝道の書第1章3節～11節の構成と意義」『尚絅学院短期大学研究報告』34集、1987年、18-19頁。「罪を犯し百度も悪事をはたらいている者がなお、長生きしている。にもかかわらず、わたしには分かっている。神を畏れる人は、畏れるからこそ幸福になり…」(8: 12)と語り、コヘレトは悪人の長寿を不条理であるとする。長寿は、神の平和（シャローム）の賜物であると考えられていたからである。佐々木哲夫「平和・シャローム・聖戦（ジハード）」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第22号、2004年、134頁。

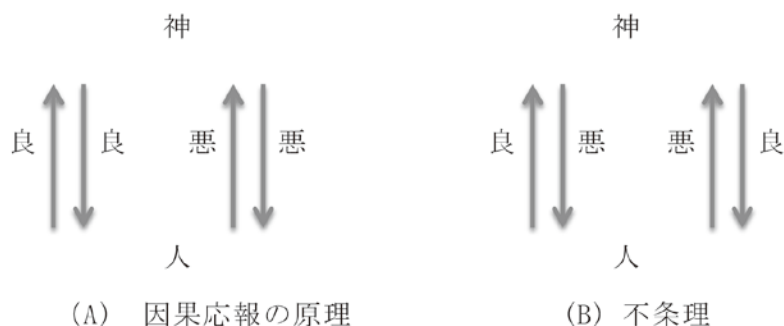


図2 神と人との関係

原理に基づいていた。ヨブの問題は、被災という現象にあった。応報原理を厳格に適用した友人たちの議論は、災厄の原因は罪を犯したからであるとの推論によっていた。応報原理を同じように厳格に適用するヨブは悩んだ。原因であるはずの罪に心当たりがなかったからだ。無垢の信仰者に災厄が下されたことになると思われた。図2(B)の不条理である。応報原理が機能しない不条理の事例に対して応報原理を押し付ける友人たちの議論は、行き詰まってしまう<sup>82</sup>。エリフ弁論は、当初、応報原理を適用する論理で議論を進めたが、やがて、その行き詰まりに気づく。そこで、エリフは応報原理から離れ、新たな視点からヨブの状況の解明を試みようとした。換言するならば、ロジカル・シンキングからクリティカル・シンキングに移行したのである<sup>83</sup>。罪や無垢の信仰という原因に由来しない、ただ神から災厄が下されたと映る神と人との関係を説明し得る別の原理の解明を模索したのである<sup>84</sup>。エリフは、ヨブの災厄を応報原理でなく創造者と被造物の関係の視座から俯瞰しようとしたのである。だが、ヨブに対するエリフの議論は、被造物の立場からの議論に過ぎなかった。他方、神の言葉は、その議論を引き継ぐかのように、創造者の立場からヨ

<sup>82</sup> ヨブ記における不条理の議論は、神と人との関係を前提としており、アリストテレスの四原因説や主体性に基づく哲学的理解とは異なると考える。門秀一『不条理の哲学』創文社、1972（昭和47）年、201-11頁。

<sup>83</sup> 讚美歌「アメイジング・グレイス」の作詞者ジョン・ニュートンは、奴隷船の船長だった時「この仕事を神の恩寵が私に分け与えてくださった職業と考え、良心の面から心掛けていたことと言えば、奴隷が私の管理下にある間は、彼らを、私自身の安全の配慮が許す限り、可能な限り、人間的に扱う事でした」と述べている。その考え方は、キリスト者船長としてはロジカルかも知れない。しかし、視座を変えて、その後、奴隷船長をやめて英国国教会の聖職者になり、奴隷貿易反対運動に関わった。後者の行動を選択した考え方は、ロジカルを超えた考え方、すなわち、クリティカル・シンキングである。ジョン・ニュートン『アメージング・グレース物語—ゴスペルに秘められた元奴隷商人の自伝』彩流社、2006年、232頁、274頁。

<sup>84</sup> 原因がないのに良い結果が下される場合も厳密に言えば不条理になるが、この場合、人は運が良かったと思う程度で問題にしないだろう。

ブに議論を投げたのである。

エリフの弁論は、上述の論考のとおり、表1のエリフの弁論(4)(36:1-37:24)において当を得た議論に到達したと肯定的に評価し得る。エリフ弁論や神の言葉が提起した創造者〔神〕と被造物〔人〕の関係概念こそが、現世において応報原理を狭義に適応する御利益信仰を超越し、かつ、不条理を超克するに至る信仰の視座であると考ええる。それは、悪魔の試みにおいて御利益を排したイエス・キリストの応答の言葉「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』<sup>85</sup>と書いてある」(マタイ4:10)や弟子に対するイエス・キリストの言葉「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」(ヨハネ9:3)と共鳴する。エリフ弁論は、創世記冒頭において示された創造者と被造物の関係を再確認させる。ヨブは、創造者と被造物の関係という視座における信仰において悔い改めに導かれたのである。ヨブにおける祝福の回復は、それ故、悔い改めに起因する応報的結末でなく、神からの一方的な恵みの賜物と解されるべきである。

## 7. おわりに

本論の冒頭において、東日本大震災の大津波によって壊滅的被害を被った大船渡の被災者たちを支えた山浦玄嗣医師の体験の記録を引用した。山浦医師は、大船渡の人々の証言をさらに次のように紹介している。

われわれが住んでいるのは、本当に津波が多い地域です。約半世紀前の1960(昭和35)年にはチリ地震津波が来て、津波としてはそれほど大きなものではありませんでしたが、それでもたくさんの方が亡くなりました。その前は、1933(昭和8)年の昭和三陸地震の大津波で、これは壊滅的な被害をもたらしました。そして、その前のは1896(明治29)年の明治三陸地震の大津波です。私どもは繰り返し、繰り返しかうした津波の経験をしているものですから、津波のことを決して忘れることはありません<sup>86</sup>。

わたしは、あの惨害のさなかに、何千人という気仙の人間を診ました。そして涙ながらにその悲惨な話を聞きました。彼らと一緒に泣きました。女房を亡くしたり、亭

<sup>85</sup> 申6:13

<sup>86</sup> 『なぜ』と問わない』43頁。

主を亡くしたり，子どもを亡くしたり，親を亡くしたり，そういう人たちと一緒に泣いてきました。けれども、「なして，おらァこんなこんな目に遭わねァばなんねァんだべ」という恨み言を聞いたことはただの一度もありません。これははっきり申し上げておきます。ただの一度もない。私は不思議に思います。東京の人はなんでみんな同じこと考えるんだろうと。…友たちも怒りだして言うんです。「気仙衆ァネズミだってそんなごどァ考えねァ。」<sup>87</sup>

大津波の悲惨な体験の後に因果応報による不条理を問うことなく，以前のように自然とともに生きる気仙の人々の姿に，ヨブの再祝福やコヘレトの空しさとは異なる，エリフ弁論と神の言葉の時空を超えてのエピローグを見るのである。

---

<sup>87</sup> 『「なぜ」と問わない』48頁。